



# 夏少年



凜音

快晴だ。

区立病院の屋上の扉を開け放つと、真っ白なシートが真っ青な空に翻っていた。そのはためく隙間から貫くような夏の日差しが凧を出迎えた。網膜を焼く光線から目を庇いつつ広い屋上を見渡せば、何時もの場所に車椅子の少年がいる。

「夕立。」

凧が呼ぶと、凧にはためく膝掛けを押さえながら金網の外を見つめていた少年は、ゆっくりと振り向いて笑った。

「……凧。来てたんだ、」

「毎日来てるだろう。それより、今日もここか。一体どうやって、」

屋上へは階段でしか行けず、車椅子用の昇降リフトがあるとはいえ夕立一人で登るのは難しい筈だ。それなのに、最近毎日のように夕立は屋上にいるのである。一度、どうやって屋上に来るのかを尋ねたが、夕立は「早起きして頑張っているのさ。」と笑うだけだった。夕立が早起きを苦手としていることなど凧が一番よく知っている。

「早起き、なんて云うなよ。」

「分かった。白状するよ、」

夕立は可笑しいのを堪えるような顔をして、今凧が入ってきた屋上通用口を指差した。

「夕立。お客さんかい、」

地上三十階のこの屋上へ来る人は少ない。夕立と凧の二人、それからリネンを乾かしに来る人くらいで、その上後者が来るのは早朝若しくは夕方のみと決まっている。てっきり二人きりだと思い込んでいた凧は、背後の訪問者の声に素早く振り向いた。

立っていたのは長身の、まだ若い、見知らぬ医師だった。回診の途中といった様子で、小脇にカルテを抱えたまま二人のいる方へ手を軽く振っている。

「散歩は先生に手伝ってもらっているんだよ。」

夕立は笑うと、医師の居る通用口の方に移動を始めた。凧はその後ろを押してやりながら、医師に頭を下げた。

「初めまして、」

「凧君だね。夕立から聞いているよ。霧沢と言います。宜しく、」

霧沢と名乗る医師は屈託無く笑った。三人で屋上通用口の扉を順にくぐる。明るかった屋上のために彼等の立つ通用口は余計に暗く見えた。白衣の長身を心持か がめて、夕立の次に通用口をくぐり抜けた霧沢は、慣れた手つきでリフトに夕立を乗せると、夕立に体調などを訊きながら手持ちのカルテに書き込んでいく。滑りやすいクリーム色の膝掛けを落とすことも無いその手際の良さを、近くから凧はぼんやりと眺めた。

「凧、カルテを覗いてご覧よ。面白いよ、」

目が慣れないうちは薄暗い階段を、ただ横を付き添って歩く凧に、夕立は無邪気に耳打ちする。カルテには個人的なことや病状が書かれていることなどを考えると、あまり気が進まない。

「何で、」

「いいから。」

夕立があまり愉しそうにしているので、凧はしぶしぶ、しかしそっと後ろからカルテを覗き込んでみて、思わず吹き出しそうになった。

カルテには所狭しと落書きがされてあった。左上隅に描かれた蛙の絵など、それは丁寧に彩色がなされており、如何にそのとき熱心だったかが伺える。どの絵も決して下手なわけではなく、むしろ上手だとさえ凧は思ったのだが、それに比べて字の方は全然読めない。

「こら。だめじゃないか、プライバシーの侵害だぞ。」

後方で笑いを噛み殺している凧に漸く気付いた霧沢は、おどけた様子で書きかけのカルテを隠す仕草をして見せた。

「先生、それって他の先生も見るとですか、」

「翻訳が必要だと思うだろう。」

凧の、カルテを見たものには当然ともいえる質問に夕立は笑った。霧沢はカルテをまじまじと見つめ、そして顔を上げる。

「大丈夫。僕が直接渡しに行くから。蛙は昨日、看護婦には好評だった、」

拳で軽く自分の胸を叩いて見せる霧沢がおかしくて、夕立と凧は病室の前で彼と別れてからもまだ笑いを堪えるのに苦労した。

「あんな先生がいたなんて知らなかったな。早く教えて呉れたら、こんなに頭を悩ませることは無かったのに、」病室に戻り、ベッドに体を起こして本を読む夕立に凧は云った。夕立はニコニコしながら頁を繰る。

「だってさ。僕が毎日屋上にどうやって来ているのか考えている凧を見ているのが面白かったんだよ。毎日毎日、飽きもせずあんなに真面目に考えてるんだもの、」

夕立が本が面白くて笑顔で居たのではないことを知ると、凧は軽く夕立の頭を小突いた。白い病室に、少年たちの笑い声が満ちる。

こうして笑っていなければやっていられなかった。夕立を嫌いなのではない。大切な親友だ。少なくとも、凧はそう思っている。

そもそも夕立は活発な少年だった。先々月の電車の事故に遭うまでは。その日、夕立は何時ものように何時もの電車に乗り、凧は寝坊して一本遅い電車に乗った。二人の普段乗る時刻の電車では始業時刻にはぎりぎり、他の生徒はあまり乗らないが、通勤する大人たちで車内は込み合う。早朝の満員電車の脱線事故は 沢山の被害者を出した。死傷者計百五十三名。下半身の自由を奪われた親友が、一人。面会できるようになって暫く経ってから初めて会いに行ったときに夕立の頭と腕に巻かれていた包帯の白さを、凧は鮮明に思い出すことが出来る。

「無事だったんだ。よかった、凧が寝坊して。」

あの時夕立は笑ったが、その表情に今のような明るさは感じられなかった。何も云えなかった。事故の日に夕立に返すつもりだった、青空の写真ばかり載っている本は、いまだに返せないままで鞆に入れたまま持ち歩いている。

今はもう包帯の巻かれている箇所も大分目立たなくなった夕立と他愛も無い話をするうち、食事の時間を知らせるアラームが鳴った。このアラームが、今では凧の退室時刻の合図にもなっている。

「じゃあ、僕はもう帰るよ。」

「うん、また今度。」

立ち去ろうとする病室に、何時もと同じように看護婦がやって来る。屋上から病室に戻って来たときに夕立を寝台に移したときと同じように彼女もまた、慣れた手つきで夕立を車椅子に座らせる。眠気を催すような温んだ季節の終わりから、外の日差しは熱線に変わって大分経つというのに、凧には未だ夕立の車椅子の後ろを押してやることくらいしか出来なかった。食堂へと向かう車椅子を無言で見送ると、凧は下へと降りるエレヴェエタへと重い足を向けた。

「凧君。」

面会用通用口をくぐろうとしたところを呼び止められて、凧は立ち止まった。振り向くと、夕立の主治医が立っていた。屋上で会ったときと全く変わらない格好で、すっきりと背筋を伸ばしている。

「こんな時間に帰るのかい。食事は、」

「...未ですけど、」

昼食は帰宅してから摂ることにしている。別段自炊に拘っている訳ではないのだが、夕立と別れた後は病院に居辛いような心持になるというのがその理由の一つである。霧沢は凧の返事を聞くと頷いて、今凧が来た廊下を指した。

「ここの食堂で食事をしたことがあるかな。日替わりランチがなかなかいける、」

一緒にどう、と霧沢は笑って見せる。特に断る理由も無いので、凧は同行することに決めた。

夏期休暇中と云うこともあって日中は殆ど人通りの無いリノリウムの白い床を、暫く二人分の靴音だけが響いた。突き当たりのエレヴェエタホールにも人影が無い。外来、医者用の食堂は入院患者専用のそれとは区別されており、十五階にある。二十階で止まっているエレヴェエタの降りてくるのには時間がかかる。沈黙が辺りを包んだが、霧沢は慣れからかそれを苦にしていなかった。対して凧はすこぶる居心地が悪かった。霧沢を苦手としているわけでは、無いとは思っただけけれど、彼の親しげな態度にはいささか戸惑いを覚える。

「...遅いですね、エレヴェエタ、」

「もうすぐだ、」

間の抜けた機会音が、エレヴェエタの到着を告げる。沈黙を破るその機会音に何故か救われたような気持ちさえしながら無人のエレヴェエタに乗り込む。十五階の釦を押すとまもなく、扉が静かに閉まった。それを合図にするかのように、霧沢は口を開いた。

「夕立が、君の来るのを毎日楽しみにしているよ。回診の時には逐一、報告してくれる、」

「そう...なんですか、」

「この調子で治療に専念してくれたら、退院の日も早まるかもしれないな。こんなことを言うのは医者として不謹慎かもしれないけど、でもそれはちょっと残念だな。年齢の割合近い患者は、僕は初めてだから。」

霧沢のこやかな表情が、奇妙に感じられるような気がする。

何度体験しても慣れることの無い、奇妙な落下と浮遊の感覚の混じりあうエレヴェエタからは、強化ガラスを通して外の景色が見える。凧はガラスの方を向いたまま、霧沢のほうを見ないようにした。コンクリートの住宅街がみるみる落ちていくような、それともそうではなくて青空が落ちてくるような、何度見てもやはり妙な景色が眼下で繰り広げられているのを無意識のうちに睨む。どうして彼はこんなことを話すのだろう。妙に息苦しい。一刻も早く、十五階に着いてほしいという気持ちばかりが大きくなっていくのを感じる。それは凧の腹の中で不快に渦巻き、やがて嘔吐するのではないかと思うほどに、不快な感情だった。

「...不謹慎ですよ、」

予期せず口を突いて出た言葉に、凧は自分自身で言葉を発しておきながら驚いた。だが霧沢は、相変わらず背筋を伸ばしたまま立っている。ガラスに反射して見える彼の表情は、しかし、上手く読み取ることは出来なかった。重力が妙な具合にかかって、目的の階の数字のランプが点灯する。二人は黙ったままエレヴェエタを降りると、これも黙ったまま食堂へと向かった。

昼時の食堂は混雑している。不必要に広い、無機質な部屋の中には外来の患者が八割、残りの二割ほどが医療関係者だ。夕立はカウンターで日替わりランチを注文すると、先ほどの沈黙はそ知らぬ顔で凧を振り返った。

「何にする。お近づきの印に奢るよ。」

「結構です、」

凧は幾分強張った表情で、サラダとミントティを注文すると、霧沢の横の席へ座った。霧沢はカルテを取り出すと、記載事項を確認するように目を細めて眺めてから、それを卓上に置いた。余白には、今朝見たような落書きがされている。

「不謹慎だと云ったね、」

霧沢は凧を見ずに云った。視線はカルテに注がれたままである。

「ええ。患者の一日も早い回復のために努めるのが普通なのではないのですか。言動にも注意すべきだ。…少なくとも僕はそう思う、」

凧も、霧沢のほうを見ずに答えた。霧沢が治療を怠っているなどとは、思わないが、しかし、退院の時期が早まるのが残念だという言い方は、たとえそれが元来使われる意味での言葉だとしても、何故か気に入らなかった。

「妬いているのかい、」

聞き捨てならない言葉に、首を霧沢の方へ捻じ曲げる。横顔だけでも十分に、霧沢が唇を歪めたのが判った。

「…は、」

唐突な言葉に、一瞬言葉の意味の理解が遅れた。間の抜けた、笑い声になり損ねたような呼気が凧の口からこぼれる。

「……まさか、」

「どうかな、」

凧の前に、注文したサラダとミントティが置かれた。しかし、それが食事であることがなかなか認識出来ない。霧沢は凧の視線の集中しているティーカップに手を伸ばすと、角砂糖を一つ、その熱い紅茶の中に入れてスプーンでゆっくりと掻き回した。勝手なその振る舞いを見つめながらも、凧には見ていることしか出来ない。霧沢は何もしない凧の顔を覗き込むようにして囁いた。

「もう一つ入れてあげようか、」

「…めてください、」

声が掠れて上手く言葉が出て来ない。霧沢は、一度は無表情に戻った唇を再び微かに歪めると、ソーサーにスプーンを置いた。お待たせしました、と云う機械的な言葉と共に霧沢のランチも運ばれてきた。霧沢はカルテを除け食事を始めたが、凧は未だ食事に手をつけることが出来ないでいた。角砂糖の一つ入ったミントティは、白いカップの内側に金色の輪を浮かべながら冷めてゆく。白い湯気がだんだん見えなくなって行く様子を、凧は暫く凝視していた。霧沢は黙々と食事を続けながら、時々カルテに目をやり、また食事に戻る。しかし一言も発しない代わりに、ゆっくりと食事を摂っていた。

周りの医師や外来患者らは、ティーカップから立ち昇っていた湯気が消えて行くに連れて少しずつ姿を消していった。食堂に人影が殆ど無くなる頃にやっと、凧は冷たくなったティーカップを取った。何と云うことは無い、ただのミントティなのだが、それを飲み下すことは酷く恐ろしい気がした。それでも、恐る恐るカップに口を付けてみる。寒くも無いのに指が震えて、カップから紅茶が零れてしまいそうだった。

「……、」

苦い。冷めてしまっただけは美味しい筈も無いが、不快な砂糖の甘さに加えてそれは酷く苦い味がした。ミント特有の清涼感の代わりに口の中に萎むような不快感が広がって、つられるように目の前が滲む。

「不味い。」

「すぐ飲まないからだ。」

食事を終えた霧沢が、紙ナプキンで口を拭きながら当然の様に言い放つ。空になった食器を横にどけて、再びカルテを見始めると、時折ペンで何か書き込みをしながら、凧には目もくれない。

「…それに、甘いんだ。僕は砂糖を入れない方が好きなのに、」

眼が乾く気がして、凧は強く眼を閉じた。熱いものが、眼から溢れた。霧沢の次の言葉など聞かなくても想像できる。それが悔しかった。

「君が何もしなかったからだろう。」

『この写真が何処から撮ったものなのか僕知ってるよ。今度の夏期休暇に二人で見に行こうか。』

事故の前日に、借りた写真の本を指してそう云って笑ったのは凧の方だった。その約束は果たされることも無く、借りたままの本とともに、眼を閉じて届く距離の過去に置き去りのままだ。

「夏期休暇はもう終わりだろう。今は毎日来れるだろうが、休暇が終わったらどうするつもりなんだい、」

霧沢は、カルテを差し出した。無機質な直線で区切られたその紙の上には、癖の無い整った字で「十四時三十分、検査終了（二十三階検査室2）」と記されてあった。

「随分と嘔吐きなんですね、」

「達筆すぎて君たちには読めなかつただけさ。」

霧沢は右眉だけを少し上げて笑ってみせた。凧も眼を擦ると立ちあがった。本を親友に返さなくてはならない。

「御馳走様でした。...紅茶、不味かったです、」

「お近づきの印さ。今度は友達と、美味しい紅茶を飲むといいよ。」

凧はエレヴェエタへと急いだ。その後ろ姿の遠ざかるのを見ながら、霧沢はテーブルを片付け始める。

「こんな所でなく、外で美味しい紅茶をね、」

少年の足音の遠ざかってゆく昼下がりの白い食堂には、若い長身の医師が一人、残された二人分の食器を片付けるだけだった。

エレヴェエタを待つ余裕など無かった。あの間の抜けた機会音で救われた気分になどなりたくは無かった。十四時五十分。足が勝手に階段を駆け登っていた。遅刻に等しい毎朝の登校で鍛えた足がこんなところで役立つとは夢にも思わなかった。財布やレモン水の壺と本とが跳ねる鞆の中で乱暴にぶつかりあう。六階分まで駆け上がって、足が重くなってくるのを感じたが、休んでなどいられなかった。

「夕立、」

車椅子の後ろを看護婦に押されて移動している少年を見つけ、凧は駆け寄った。看護婦がその足音に幾分驚きながらも振り向く。

「夕立君なら屋上に行ったわよ。」

私が連れて行ったもの、と云う看護婦の声を次の瞬間には背中で聞きながら、凧は軽く片手を挙げ、目的の場所へ急いだ。夏期休暇中で良かったとつくづく思う。人通りの少ない廊下は走り易かった。

快晴だ。

通用口の重い鉄の扉を開け放つと、朝よりも凶悪になった光線が凧の目を襲う。焼きつくような熱から目を庇うのも忘れ、はためくシーツの間を駆け抜ければその先に、金網越しの空を見つめる親友が居た。凧は全力疾走のために弾んだ呼吸を整える。夕立は凧の存在に気付いているようだった。

「御免。...遅くなって。」

夕立は振り向いて、それからゆっくりと微笑んだ。逆光の所為で表情は読み取りにくい、確かに微笑んでいるようだ。

「...帰ったんじゃないかったの。」

「忘れてた用事があって、戻ってきたんだ。忘れちゃいけないことだったんだけど、」

おぼつかない手許で鞆を開ける。階段を駆け登った所為で中身は目も当てられない惨状だったが、そんなことはこの際どうでも良い。青空の色をした表紙の本を掴み取ると、鞆から出して、今度は躊躇うことなく夕立に差し出す。

「御免。...本当に、御免、」

喧嘩らしい喧嘩などしたことは無かった。だから謝ることも、これが初めてのよな気がする。夕立が怪我をしてから、無意識のうちに距離を置いてきたような感覚。この本を返すことで、その距離が少しでも縮まれば良いと、凧は心から思った。縮めようと、心から思う。けれど思うだけでは、駄目なのだ。

「明日にでも...、否、今から直ぐにでも、見に行かないか。僕が、絶対連れて行くから、」

日にあたる時間が極端に減った所為か象牙のように白い肌の夕立を直視するのは難しかった。どうしても、事故に遭う前の活発だった彼を思い出さずにはいられなかったからだ。屋上を吹き過ぎる熱い風が、夕立の髪を揺すって行った。真夏の太陽の下、白い肌にはよく似合う、輝くその蜜色の髪がとても眩しい。夕立は逆光の中でもはっきりとわかる何時もの笑みで凧を見返すと、差し出された本をそっと、然ししっかりと受け取ってくれた。

「見つかるかと煩いんだ。凧が何時までも切り出さないから、待ちくたびれて、この夏は二十冊も本を読んじゃったじゃないか。」

穏やかに本ばかり読んでいる彼は別人のようにさえ凧には受け取れたが、夕立は結局のところ、何も変わっては居なかったのだ。随分緩くなってしまった涙腺を必死に励まして、夕立も笑い返した。

「じゃ、早速、」

「ああ。疾うに考えることなんか諦めていたんだから、」

はためくシーツを手で除けもせず突っ込んで、歓声を上げながら通用口へ向かう。それは革命の成功のように少年たちを外へと駆り立てた。金網越しの青空から脱出したら、まず最初に美味しい紅茶を二人で飲もうと凧は思った。

蒸し暑い夜だった。空には星と、少し重く垂れ下がった蒼い月が見えるだけだった。然し、この季節特有の湿気を吹き飛ばすような賑やかな様子が、少し遠い処に見えた。祭のお囃子、笑いさざめく声、蜜樹はそれらを神社の大木の上から見下ろしていた。待ち合わせ場所を間違えたということは無い。ただ蜜樹は、彼の到着の遅さに少しだけ腹が立っていた。今日は特別な日なのだ。年に一度のこの日は、蜜樹と希夜にとってはとても大切な行事であった。とても大切、とは云うが、二人が初めて知り合ったのがこの納涼祭だったというだけで、他に深い意味は特に無い。

蜜樹は浴衣の腰帯に挟んでおいた扇子を取り出して、少しでも涼しくなるようにと風を送った。希夜の姿は見て取れない。何かあったのではないかという考えが脳裡を掠めたが、その確率は低いことに思い当たって、蜜樹は一つ溜息をついた。

「蜜樹、」

胸元を少しだけ肌蹴て風を受けていた蜜樹は、彼を呼ぶその声に少なからず動転して、振り向いた。

「希夜、遅いじゃないか。来ないのかと思った、」

「悪い。……林檎飴買ってきた。」

希夜は枝から顔をのぞかせると、林檎飴の入った袋を翳して見せた。蜜樹が林檎飴の入った袋を受け取ると、希夜は樹を上り蜜樹の隣に腰掛けた。

「今夜は去年よりも人が増えていないか。買いに行くの大変だったんだぜ、」

早速林檎飴を舐めながら希夜は云った。毒々しいほど赤い飴は、希夜の唇を赤く染めている。蜜樹はただ何となく希夜の唇に視線が吸い寄せられていたのだが、希夜が蜜樹の目の前で手を振ったことで我に帰った。

「何見てるんだよ。」

「……別に、」

「ふうん。」

希夜はどこか愉しげに正面へ向き直った。

眼下には夜店が並び、人通りも賑やかに夜が更けていく。夕暮れの橙から、宵闇の紫へ。紫から藍へ。空は刻々とその変化を見せながらやがて辺りは暗くなった。夜店と、道に吊るされた堤燈の明かりだけが宵闇の中でぼんやりとした光を放っている。

「行こうか。」

どちらからとも無くそんな言葉が毀れ、二人は大木を降り始めた。登り慣れた樹だから特に気をつけるということも無い。二人は地面に降り立つと、夜店の並ぶ納涼祭の会場の方へ歩を進めた。



「黒山の人ばかりって、こういうことを云うのかな、」

蜜樹は半分うんざりしながら希夜と屋台を見て回っていた。食べ物を扱う屋台もあれば、金魚掬いや籤引きを出来る屋台もある。どの屋台からも威勢の良い声 が飛び交い、それに客の声も混ざって、心地良いざわめきとなっていた。食べかけの林檎飴を、他の人の服につけてしまわぬよう細心の注意を払いながら、人込みを掻き分けて進む。こういうとき、希夜は見事に人の波を掻い潜れるが、蜜樹は悪戦苦闘するしかなかった。やっと少し開けたところへ出たと思ったら、其処 に希夜が立っていた。

「遅いぜ、蜜樹、」

「僕は君ほど器用じゃないんだよ。」

希夜が立っていたのは射的の屋台の前だった。唇の端を少し吊り上げた、彼特有の笑顔で希夜は蜜樹の林檎飴を取り上げた。

「射的、やっていかないか。飴は俺が持っているから、」

「.....ああ、」

たまにはこういう気晴らしも良い。蜜樹は渡されたちやちな銃で狙いを定めた。これといって欲しいものは無いが、取り敢えず、水笛を狙って一発撃った。玉は大きく的を外れて、隣の紙風船に命中した。その後二回撃ったが、最初の紙風船以外に収穫は無かった。希夜が笑う。

「今度は俺の番。飴、持っていてくれ、」

「ああ。」

射的で獲得した紙風船と林檎飴を持って、蜜樹は希夜の後ろに立った。こういう下らない遊びにも、希夜は集中して臨む。一発目は外したが、二発目に蜜樹と同じ紙風船を落とし、最後に小さな熊の縫いぐるみを落とした。蜜樹の方へ振り返って、愉しそうに戦利品を掲げる。

「蜜樹よりは俺の方が上だな、」

「偶然だろ、」

蜜樹は飴を渡しながら笑った。つられて希夜も笑う。笑いながら、希夜は蜜樹に熊の縫いぐるみを差し出した。

「やるよ。何だかこいつ、蜜樹に似ているから。」

「いいの、」

希夜が頷く。蜜樹は縫いぐるみを手に取った。

「似ているかな、」

「何となくね。」

後ろから浴衣を着た客が来たことに気づいて、希夜は蜜樹の手を取った。

「行こう。」

云い終わるか終わらないかのうちに、希夜は蜜樹の手を引っ張って人込みを縫うように進んだ。蜜樹は少し慌てたが、手を引かれるままに進んだ。

「何処に行くんだ、」

「好い処さ。」

蜜樹の問いに、希夜は笑って答えた。

道は両側を夜店で占められ、様々な色や光、匂いやさざめきに満ちていた。待ち合わせのときには遠く響いていたお囃子も、近くにきた所為かより鮮明に聞こえる。堤燈の灯りと、薄い月の灯りとで、夜道はくっきりと浮かび上がり迷子になる心配は無さそうに見えた。然し、昼間のそれと違って、希夜に手を引かれて 行く先は蜜樹には想像できなかった。進むうちに、段々と灯りが少なくなってきた。さらさらと水の流れる音が微かに聞こえる。人通りは絶え、月明かりのみで希夜は進んでいく。何処へ来たの か――考える暇もなく、蜜樹は転ばないように気を付けながら希夜の後ろを歩くだけだった。

「着いた。」

竹藪の中を進んで、開けたところに出ると希夜はそう云って立ち止まった。蜜樹も立ち止まり、辺りを見回すが、暗くてよく見えなかった。

「何処なんだ、」

「だから、好い処だって云ったじゃないか。」

何処となく愉しげな希夜の声に、希夜は改めて辺りを見回してみる。細く、背の低い竹が二人の立っている位置の前方を取り囲み、耳には川のせせらぎが聞こえるだけだった。そのせせらぎの反対側、二人の後ろには丈高い竹がざわざわと音を立てている。吹いてくる風が心地良かった。

「さあ、始まるぞ、」

川の向こうに視線を遣った希夜がそう云った途端、爆発音が聞こえ、空に華が咲いた。上空に釘付けになった蜜樹の視線の先で、次々と光が現れては消えていく。

「花火……、」

「特等席だぜ。感謝しろよ、」

林檎飴を齧りながら希夜は蜜樹に云った。その声は酷く愉しそうだった。希夜はいつも、蜜樹の知らないことを知っていて、それが愉しければ分けてくれる。希夜は花火から目を逸らして、希夜の白い横顔を見つめた。空へ向かった希夜の眼に花火が映りこむ。その光は蜜樹を惹きつけてやまない。

「どうして、こんなに好い場所を知ってたんだ、」

「探したのさ。今日は特別な日だろ、」

齧りかけの林檎飴を蜜樹の方へ差し出して希夜は笑った。そして付け加える。

「蜜樹が驚く顔を見るのが、俺の愉しみなんだよ。」

「……、」

蜜樹は黙って差し出された林檎飴の、林檎が露出している部分を齧った。その手を希夜は取って、蜜樹の至近距離まで顔を近付ける。

「甘いのはこっちだぜ、」

蜜樹が瞬きするのを見計らってか、希夜は蜜樹の唇に自分のそれを押し付けた。舌で唇を割り、何か硬いものを蜜樹の口内に残して離れる。

「何するんだよ、」

「飴の方が甘いだろ、」

「それは……、」

蜜樹が云い募ると、希夜は笑って花火に向き直った。蜜樹の口の中には林檎飴の紅い飴の部分の欠片が残って直ぐ融けた。確かに、林檎よりはずっと甘い。蜜樹も花火の方へ向き直った。花火は次々と打ち上げられ、程よく風が吹いているお陰で煙が充満することも無く、夜空に良く映えた。二人は地面に座り込んで、花火を見つめ続けていた。

「……なあ、」

ややあって、希夜が声を発した。

「又来年も、此処で花火見ような。」

視線は空に向けたままの希夜の横顔は月に照らされて青白く、ともすれば消えてしまいそうなほどに蜜樹には見えた。蜜樹はそっと、地面に突かれた希夜の手を手を重ねた。

「ああ。来年も、な、」

一年前の出会いは林檎飴がきっかけだった。蜜樹が希夜の浴衣に飴をつけてしまったことで一時口論となったが、初対面の素直さが直ぐに打ち解けることが出来る土台を作ってくれた。今日の花火は勿論、希夜は蜜樹の知らない場所を沢山知っていて、折に触れて其処へ案内してくれる。蜜樹はそんな希夜と遊ぶのが愉しかった。そして、出会えて良かったという気持ちが、改めて大きく膨らむのを感じていた。

花火は終盤を迎え、ますます盛大に花開いていく。光が弾けるたびに躰を揺さぶるような空気の振動が伝わってきた。花火の合間には相変わらずさらさらと川の囁きが聞こえていた。二人はくど過ぎる林檎飴を舐めながら、紙風船を膨らませて頭上高く掲げた。風が二つの紙風船を一緒に攫っていったとき、少年二人は川のせせらぎに声を紛らわせて、ひっそりと昔話に興じていた。蒼い月と、盛大な花火が二人を照らしているだけで、後は全く静かな世界だった。

## トオル

---

もう、何もかもが終わりなのだと、トオルは何処かで思っていた。久し振りに帰る街にトオルの居場所はない。電車の中から見える風景は、ずっと前に住んでいた頃とは様変わりしていて、高層マンションや雑居ビルが立ち並んでいる。時々、思い出したように未開発の土地が緑色に残っていた。都市化計画に基づいて街並みは整備されつつあるようだった。然し、トオルが望んでいた風景は其の紙の上にはない。もう消えてしまったのだろうか、あの頃の――  
「――駅です。お降りの際は忘れ物など無き様――、」

車内にアナウンスが流れる。トオルは席を立つと、横に置いていた鞆を掴んで電車から降りた。駅の様子も変わっていた。鄙びた、と云う言葉が一番しっかりと来る駅だったのに、やけに近代化されている。自販機でサイダーを買おうと、トオルは改札を抜けた。

――何年ぶりだろう、

進学してから、幼少期に住んでいたこの街の事等全く記憶に上らなかったのだ。本来は好きな教科を勉強する筈だったのが何故か苦手な科目も履修したり、学生同士で集まって飲みに行ったり、けれどそんな中でトオルは不思議な疎外感を味わっていた。

夏が来て、学校が休みになった。知り合いからは夏休みに旅行に行く事を誘われていたのだが、この二年ですっかり人付き合いが億劫になってしまったトオルはそれを断った。代わりに、と云うのも妙だが生活している狭いマンションの一室を片付ける事にした。

不要品は持ち込まない主義のトオルだが、いざ掃除に取り掛かると要らない物は沢山あった。きつこの街を離れるときには、純粋にそれを大事に思っ持っていたのだろう。然し現在のトオルにとってそれは無意味な、インチキ芝居のような思い出に過ぎなかった。

古い写真、手紙、愛用していたペンケース、狂った方位磁石――どれも、懐かしいというよりは、記憶の隅に沈殿していてよく見えない、おぼろげな感情の残りという感じだった。

「――、」

あらかた物を捨て終わった頃、トオルはブリキの缶を見つけた。銀色のボディに空色のラベルが貼り付けてあり、dropsとラベルの隅に白く文字が印刷されていた。懐かしい、と云う感情が、其処で一息に持ち上がってくる。

それは、正に空を映したような色をしたドロップスの入れ物なのである。幼い頃居た街の、小さな駄菓子屋で、唯一の友達と呼べたミチルとよく買っては分けあっていたものだ。ミント味のこのドロップスを、トオルとミチルは「空色ドロップス」と呼んでいた。実際の商品名は、別のものである。だがそれが何だったかはどうでも良かったし、トオルとミチルは勝手に空色ドロップスと呼んで、学校が終わってからよくほおぼって帰ったものだった。

鞆の中で、カラン、と音がする。ブリキ缶の中に入っているミチルのくれた白磁の球が鞆の動きに合わせて音を立たしたようだ。

## ミチル

ミチルは疾うに亡い。トオルが街を離れる頃、学区の外れの病院で息を引き取ったと、当時の担任が話していたが、トオルは一度も見舞いに行けなかった。否、行かなかったと云う方が正しいかも知れない。ミチルは学校の裏山や、敷地内の草陰、グミの成る樹等、そう云ったものに詳しい活発な少年だった。彼が無機質なリノリウムの床の、白い病室でただ病魔に冒されていく姿を、トオルは見たくなかったのである。何通か手紙を書いたが、返事はなかった。遺骨は彼の好きだった学校の裏山から程近い墓場に納骨されたと聴かされただけで、トオルは間も無く転校した。それきり、ミチルの事はなるべく考えないようにしていた。やはり見舞いに行けば良かったと後悔もしていたし、ミチルの死というものを受け入れたくなかったのである。今になってミチルの元を訪れるのも随分と遅くなってしまったとは思いますが、空色ドロップスの缶に収められていた、唯一と云っていいミチルの遺品を、ミチルの元に返したかった。

当時、硝子球を弾いたり、教師には割れて怪我をすると叱られたが窓硝子の棧をレール代わりに転がしては遊んだりすることが少年たちの間で流行っていた。トオルもミチルも例に習って其れに夢中になった。青や橙や赤の硝子球を弾いてはぶつけ、先に自分の硝子球を落とした者が負け。至って簡単な遊びである。駄菓子屋では、本業の駄菓子と共にそう云った少年たちを狙って硝子球が幾つも店先に並べられていた。中には少女向けにおはじきなども売られていたが、硝子球もおはじきも当時の子供たちにとっては少々値の張る物だった。なので、割れないようにと大事に扱う事もまた、彼等の流儀でもあった。手持ちの数を競ったり、気にいった模様の物と交換したりする事もあった。

「トオル、」

「何、」

その日は、学校の裏山にある防空壕跡——ミチルが見つけた二人だけの隠れ家だった——で、二人はドロップスをほおぼりながらサイダーを飲んでいた。ドロップスの甘味が、サイダーと口の中で混じって融け、丁度良い甘さになる。トオルはこうした「隠し味」もミチルから教わっていた。トオルがサイダーの壺から口を離すと、ミチルはポケットから何か取り出して見せた。

「いいだろ、これ。正確には硝子ではなく白磁で出来ているのだけれども、虹色の模様が入っているのはなかなか無いんだぜ、」

「見せて、」

「他の奴には内緒だぞ。」

それは夕暮れの日の光に映えて少し橙に見えたが、確かに触り心地が違う。虹色の波模様が白さに映えて美しかった。

「どうしたの、これ、」

「一寸用事があって遠くに行かなくちゃならなくてサ、叔父さんがくれたんだ。二つあるから、これはトオルにやるよ。」

「いいの、」

「やるって云ってるんだから、素直に仕舞えよ。他の奴には見せるなよ。欲しがると決まってる、」

トオルは手の中を覗き込んだ。段々闇が押し迫ってくる夏の空気に反応するように、白磁の球は色を変える。それは今まで見たどんな硝子球よりも魅惑的だった。

「ありがとう、」

「感謝しろよ。さて、日が暮れる前に帰ろうぜ、」

「ああ、」

水辺が近い。少しだけ沸いた水辺には蛍がちらほらと明かりを灯し始めていた。トオルはポケットに白磁の球を仕舞うと、落ちないか確認してから鞆を掴んで飲みかけのサイダーの壺を入れ、立ち上がった。

「蛍、僕にも捕まえられるかな、」

「止めとけよ。俺は新品の靴を泥で汚すほど莫迦じゃ無いぜ、」

サイダーの壺をあおったミチルがトオルの背後で云う。今日のミチルは、新品の靴を履いているのだった。

「それに、水辺の草で足に傷がつく。止めとけよ、」

「……うん、」

トオルはしぶしぶ蛍を捕らえるのを諦めた。少し笑って振り向いたミチルが、瞬時に顔を顰めた。

「――ッ、」

「.....ミチル、」

「何でも無い。一寸草で足を切っただけだ。直ぐに治るさ、」

「ならいいんだけど、」

それにしてもその日のミチルは少し変だった。帰り道、少し切っただけだというのに、靴下から真新しい靴にかけて血の染みが広がっているのである。トオルには、何故だか怖くてそのことをミチルに訊けなかった。ミチルも新しい靴が汚れているというのに平気そうな顔をしている。何も心配な事は無いだろうと思ったが、何だかやはり変な感じがトオルからは払拭されなかった。

翌日、ミチルは教室に顔を出さなかった。度々そういうことがあったので、最初はトオルも気に留めなかったが、一週間経ってもミチルは教室に現れなかった。

数日経って、担任が「残念なお知らせがあります」と放課後の掃除前の会合で云った。

「ミチルさんが体を壊してしまい、病院に入院しました。皆さん、お見舞いに行ってあげて下さいね、」

教室がざわ、となった。トオルは、ポケットの中に忍ばせていた白磁の球を握り締めた。

その時既に、トオルの転校は決まっていたのである。

## 慟哭

---

「……こんなにさっぱりしていたかな、」

トオルは母校の裏山にいた。少年だった頃自分の背丈よりも高かった草や蒿は、胸の辺りまでしか高さが無く、沼地は工業排水で汚れている。もう蛍は見られないだろう。

辺りは木々が遮って薄暗く、鳥がキィキィと哭いている。おぼろげな記憶を辿って、防空壕の跡まで来た。然し、その窪地は埋め立てられ、フェンスが張り巡らされている。少し錆びた看板には「立入禁止」と書かれていた。仕方なく、其処を後にする。様変わりしたその光景にトオルは少なからず衝撃を感じていた。

グミの成る樹も蛍の舞う水辺ももう無い。其れが、寂しく感じられた。トオルの帰りたかった場所は、帰ることを赦された場所は其処だったのに。

トオルは裏山を後にすると、若干眩暈を覚えながら、ミチルが埋葬されている墓地について調べてみた。古びた案内図はまだ健在で、若干其れに救われた。

案内図通りに歩いていくと、直ぐに小さな墓地が見つかった。トオルは線香を買うと、バケツに水を汲み、柄杓を持って墓地を廻った。ミチルのいる墓は、墓地外れの木陰の下だった。辺りには夕闇が迫っている。誰が供えたのか、青空の色のドロップスが添えてあった。線香に火をつけて供えようと、トオルは喉の渴きを感じて、駅で買ったソーダを取り出して飲んだ。温くなってしまっは美味しい筈も無いが、ミチルのからかうような声が聞こえた気がした。

――莫迦だなあ、残して家で飲んだって美味しい筈無いだろう。いつもそうやって残すんだからな、トオルは――  
「ミチル、遅くなったけど、来たよ。やっぱり一息で飲んでおけばよかったよ、ソーダ……、」

鞆の中で自己主張するように、カラン、と白磁の球が音を立てた。トオルは缶を取り出すと、白磁の球を取り出した。夏の夕暮れの色が、あの日のように白を 橙に、そして紫にと染めていく様を、飽きもせず眺めていた。供えてあったドロップスを一つ摘んで、ソーダ水で流し込む。あの日と同じ味がする。置いていこう、と持って来た白磁の球だったが、トオルは其れをポケットに仕舞った。

「ありがとう、」

鳥が哭いた。暗転する夏の空が一瞬青く光る。トオルは耐えられなくなって、ひとり、泣きじゃくった。